



奥田 弁次郎・フミ①

地域史研究者
三善貞司

刑場だった千日前に目をつけたほら吹き男・弁次郎

千日前（中央区千日前1〜2丁目）は、すぐ北の道頓堀と並んで、大阪市繁華街の中心地です。奥田弁次郎・フミ夫妻は、この千日前を開発した功労者です。今でこそ商都のシンボルのような盛り場ですが、あそこは有名な墓地でした。

フミは天保8年（1837）丹波（京都府・兵庫県北部）の農家に生まれました。小柄ですが愛敬のある働き者で、村の青年たちのあこがれの的、言い寄る男たちは多かったのですが、なんと18歳のとき「ほら吹き伊兵衛」と呼ばれた同年齢の奥田伊兵衛と、相愛の仲になります。

両親はあんな奴はだめじゃとひき離そうとしますが、二人は聞く耳を持たない。駆落ち同然に故郷を捨てて出奔、大阪へ来て高津（現・中央区）あたりで小さな八百屋の店を開きました。

フミはひとりで店をきりまわしますが、なるほど伊兵衛は怠け者。大言壮語するタイプで、一攫千金を夢見ていっこうに働きません。しかも少しでも小銭がたまるとフミに内緒でもちだし、賭博場に入りしてすつてしまふありさま、とうとう店は人手に渡り、伊兵衛は夜店や見世物小屋を手伝う香具師仲間に加わる始末となりました。

ただ一つだけ伊兵衛には優れた点があります。能弁でほらが上手なところ。ぺらぺら喋りだすと嘘かほんとかわからず、誰もがお前、よう喋るなあ、弁がたつなあと感じているうちに、弁次郎といつあだ名がつきます。本人も得意になって弁次郎と名前を改め、いっぱしの兄貴分にのしあがりました。

明治3年（1870）大阪府は千日前にあった墓地を阿倍野（現・阿倍野区阿倍野筋4丁目）に移して、この地域一帯の開発に着手します。

このあたりは元和1年（1615）頃から大坂城初代城主松平忠明が、阿波座や渡辺、三津寺にあった墓地を、新しい城下町を建設するために、移してかためた所です。それまでの地名は「下難波」でしたが、寛永年間（1624〜44）やはり移転してきた法善寺が、「千日回向」（千日の間法華経を読誦し講説する法会のこと）を始めたのが大変な評判となり、同寺に「千日寺」との俗称がつき、墓地は寺の前にあるので「千日前」の地名に変わりました。

千日前墓地には刑場があり、処刑された囚人の首をさらす獄門台まで置かれていました。雁金文七、極印千右衛門、遊女かしく、亀屋忠兵衛など、歌舞伎で有名な人たちも死罪となり、この獄門台に並べられています。

明治3年大阪府は、千日前を道頓堀とセットにして繁栄させようと墓地を移転させたのですが、なにしろ人骨の混じる灰山（火葬したあとの遺灰）が、あちこちに残っているのを見て肝を潰し、誰も手がつけられない状態でした。「火の玉が飛んでたで」「なんとも言えぬ呻き声を聞いた」「わいはこの目で幽霊を見た。ほんまに見たぞ」などと、町雀たちが真顔で噂していたころの話です。

明治7年（1874）4月のある日、弁次郎はふらーっと千日前墓地跡にやってきました。実は長男の小学生の息子徳次郎に、「こら、ごんたばかりせんと、ちつとは勉強せえ」と父親らしく説教したところ、幼い徳次郎が、「父ちゃんかて働いたらどや。母ちゃんいっつも泣いてるやんか」と眼をむいたのです。

腹を立ててポカンと子の頭をたたきとびだしたのですが、なんともいえず淋しくなり、歩き廻っているうちにいつしか墓地跡にたどりつきます。頭の中のどっかに「葬儀屋の山田屋重助な。あいつ、三勝半七（浄瑠璃で有名な心中事件の主演）の追善大法要や言うて、あやしい遺品を墓地跡で売り、もつけたそつや」と、香具師仲間から聞いた話が、残っていたのかも知れません。

ふと見ると墓地の手前に、一軒だけオンボロの茶店がポツンと建っています。墓地で法要があったころ、一服した茶店の生き残りです。留守番のばあさんが、弁次郎に話しかけました。「行くあてがおまへんね。そんでおるんやが、客はひとりも来まへん。なんでやる。あつちは道頓堀に心齋橋や。あないにぎやかなのに、ここの空地、もつたいたいと思いまへんか」「そら思うけど、こんな気味悪いところ無理や。お化けが出ると言うつやないか」「けどな、あつこの灰山、一坪50銭やで」「へえー、50銭で買えるんやったら、まあ安いな」と弁次郎があいづちを打つと、ばあさんは笑いだします。「あほやなあ。お上が50銭つけて、ただでくれるんや」えっ！一坪50銭もつけてくれるんか・・・と弁次郎はとびあがりました。

奥田夫妻によって千日前は活動写真、義太夫、講談、奇術、剣舞などの大衆娯楽が盛んになります。今回はその奮闘ぶりを紹介します。



現在の千日前

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞